

國學院大學学術情報リポジトリ

・ 第 2 回 「国学政治思想史研究の現在」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000542

平成30年度第2回国学研究プラットフォーム公開レクチャー 「国学政治思想史研究の現在」要旨

本レクチャーの具体的な主題は「丸山眞男以後の日本政治思想史研究の世界で、国学はどのように扱われてきたのか。過去を振り返り、未来を展望する。」というものであった。以下、その要旨を紹介する。

公私の分離

丸山の初期業績を集めた『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1952）の第一章は、自然的秩序と人間社会の秩序を同一性格のものとする朱子学に対し、徂徠学は人間社会の「道」と自然秩序とを分離した、と評価し、ここに政治的なものの自立を見る。そして徂徠から宣長への流れの中で、こうした政治的＝公的なものと、私的世界との分離が図られることになるという。丸山はここに近代的意識の成立を見る。第二章は、自然的秩序を静止的に維持しようとした朱子学と、聖人による「作為」を重んじて社会の動態的変化に対応しようとした徂徠学とが対置され、後者の登場を日本における近代的思维の登場と位置付ける。そして宣長における神の「作為」への絶対的帰依が徂徠の聖人に対するそれと類比される。

西洋思想を念頭に置いて江戸時代の歴史の中にも「近代」の可能性を認める本書は戦後の諸研究の一出発点となったが、既に批判され尽されている、とも言われている。

被治者の絶対的服従

宣長における公私の分離は、反面、公的世界における人々の主体性の否定の裏返しに過ぎない、という点を問題化したのは、松本三

之介『国学政治思想の研究』（未来社、1972、初出1957）である。松本は、主情主義的な国学思想にとって、政治においては被治者の心情把握を介した服従確保がその課題となり、変革の否定がその社会的意義だった、とした。松本は宣長思想を天皇制支配の一元流と見做している。

但し松本は、宣長を基準に国学政治思想像を造形したため、幕末国学もそこからの変容・離脱というかたちで評価されることになった。幕末国学が尊王攘夷運動に影響を与え、体制変革の起爆剤になった点を積極的に評価できない点、方法上の理由があったか。

美を重んじた、規範なき政治態度

宣長における規範否定の問題性を丸山も指摘していたが、国学思想のそうした性格が現実政治のなかでどう展開したかを問うたのが渡辺浩「「道」と「雅び」」（一）～（四）完『国家学会雑誌』87（9・10、11・12）、88（3・4、5・6）（1974-1975）である。渡辺は、美を重んじて普遍的な規範を信じない国学者の活動が、無倫理的な政治操作、さもなくば非政治的な政治運動に帰結した、その過程を描いた。この論文は、道徳からの政治や文学の分離を評価した丸山とは観方が逆になっており、普遍的な道徳・価値を共有しないことの政治的危険性を強調するものである。

宣長の政治秩序観の構造分析

松本・渡辺のように宣長の思考様式とその後を、社会的機能を意識しつつ論じる国学政治思想史に対しては、宣長を政治思想の枠内

に切り詰めるもので、『古事記』に迫った注釈学者としての宣長の思考を読みとく作業を欠く点、問題があるとする熊野純彦『本居宣長』（作品社、2018）の批判がある。

しかし平石直昭の「初期宣長の思想形成」（『社会科学研究』35-5、1984）や、宣長の社会秩序観と言語秩序観の相即性を示した相原耕作「本居宣長の言語論と秩序像」（一）～（三）（『東京都立大学法学会雑誌』39-1、39-2、40-1、1998-1999）は、テキストに即して宣長の思想形成を分析し、その思考の特徴を前景化するものであり、熊野の批判が当たらないように思われる。但し、政治思想史としての固有性はそのぶん薄まっているとも言えるのだろうが。

天皇制国家とそれに対するオルタナティブ

抑圧的な国体論の前史として国学思想を捉える視点は、松本の後、米原謙『国体論はなぜ生まれたか』（ミネルヴァ書房、2015）等が展開している。

他方、国学政治思想の可能性に注目した議論も登場している。それが以前は敬遠されがちだった平田篤胤系列の国学を評価している点、興味深い。

原武史『〈出雲〉という思想』（講談社学術文庫、2001、初出は1996）は、出雲のオオクニヌシが平田神学にとって幽界主宰神として大きな意味を持ったことを述べた上で、明治期に平田神学を引き継いだ千家尊福がオオクニヌシ祭祀の重要性を強調して祭神論争を引き起こすものの敗北し、このとき国家によって神社の宗教性・幽界論が否定された、と説く。そして天皇中心の国家とは異なる可能性がオオクニヌシを重んじた平田神学には秘められており、その流れは出口王仁三郎らに流れ込む、と展望する。現実の国家に対するオルタナティブを国学思想から発見しようとする大きな議論である。しかし「幽冥を担うオオクニヌシ」が「顕世を担うアマテラス」に

抹殺された、という二項対立図式では、捨象されてしまう要素が多すぎるのではないか。

こうした国学思想に現実の国家とは異なる政治秩序の可能性を探る研究の極北は、折口信夫を理念型にして到達点とする宣長・篤胤からの「国学」の道統を描き出した石川公彌子『〈弱さ〉と〈抵抗〉の近代国学』（講談社、2009）になろう。しかし折口思想のコミュニタリアンの再解釈の是非はさておき、こうした独自の理念型から外れた近代国学を「国体学」と称して国学扱いしないその姿勢に従えば、同時代的・研究史的に国学とされてきたものの多くを排除してしまうことにもなりかねまい。

（三ツ松誠）